

# 平城宮第一次大極殿院 楼閣の復原設計

はじめに 平城宮第一次大極殿院楼閣の骨格復原については、『平城報告 XI』（奈文研1982）で初めて示され、以後平成5年（1993）、平成13年（2001）に改良案が提示された。いずれも前案の構法的弱点を修整したもののだが、今年度再検討した結果、新たな問題が生じたのと同時に修整を加えたので報告する。その結果、1案に絞り込めず3案同時検討となり、さらに問題が発生したので、今後の参考のために併せて示しておく。

## これまでの復原成果と設計要旨

**発掘成果** 東楼（SB7802）の発掘調査により、平面規模桁行5間（22.9m）×梁行3間（11.52m）、柱間寸法桁行4.58m（15.5尺）等間、梁行3.84m（13尺）等間。総柱式で側廻りを掘立柱（根入れ深さ；掘立柱底～礎石根石約2m）とし、内部を礎石建。楼・回廊の床は同レベル（礎石根石同士が同レベル）。基壇規模は東・西・北三方とも側柱から8尺の出、基壇周囲パラス敷きで雨落溝はないことが判明。出土遺物からは廃絶時期（木簡）、掘立柱足元の形状や仕様（柱根）、隅木の存在（隅木蓋瓦断片）、三手先雛形の存在等が知られる。さらに2001～02年の発掘で西楼と思われる遺構も検出され、基壇の出が若干違うもののほぼ同様の建物があったことが判明。

## 復原案の変遷

1) 昭和57年（1982）復原案<sup>2)</sup> 巨大で深い柱根から、高い楼造で前面に回廊南半部が廂状に取り付き、側柱を通柱とし中間に床・縁を設けたものと推定。出土隅木蓋瓦より入母屋造に設計。初重正面中央三間を扉口に想定。

2) 平成5年（1993）復原案<sup>3)</sup> 梁行3間の通柱式という遺構の特徴を尊重し切妻造に変更。側柱を通柱とすることは踏襲。梁行が3間と広いため、二重虹梁葎股式でなく絵巻物等にみる三重虹梁葎股架構を採用。軒は二軒で出が8.7尺、組物は平三斗に設計。楽台もしくは望楼の機能を想定し、2階の正背面を開放、両側面3間すべてを白壁に推定。

3) 平成13年（2001）復原案（図22）<sup>4)</sup> 切妻造案で妻喰羽を9～10尺出すのは構造的に困難と判断し、出土隅木蓋瓦から隅木入建物に変更。1・2階の通柱をやめ、2階平

面を遞減させて隅の間正方形にすることで真隅隅木を納める。側廻り掘立柱の理由は、楼造建築の重心が上方にあって不安定なうえに1階開放ではさらに不利になるからと判断。総桁行長さに対する梁行が大きく、真隅の寄棟屋根を架けると大棟が短く見え、また楼造の寄棟が皆無であることから屋根形式を入母屋造とする。1階側柱は入側柱と同じ高さとし、二手先腰組を設け、その上に柱盤を置き2階柱を立てる。遞減により1・2階の柱筋は異なるが、その差は組物一手以内とし鉛直荷重の流れを考慮。柱盤の入れ方は法隆寺経蔵に倣い通肘木上に載せ、柱盤上に2階床・縁板を張る。2階床と別に1階に組入天井を張り、宙を飛ぶ柱盤や隅又首内部の悪い納まりを隠すとともに1階の装飾とする。2階内部にも柱を立て、組物上に組入天井を張り、小屋組は束・梁架構とする。軒先が高く十分な軒の出を確保する必要があり三手先とする。三手先組物形式は出土建築雛形に倣う。

## 最新復原案の問題点

- ① 2階隅の間平面が正方形でなければ隅木が真隅に納まらないとするが、構法上そうともいえず遞減にこだわる必要はない。また、上層隅の間を無理に正方形にしたため、中央三間の桁行一間寸法が下層よりも大きい。
- ② 腰組二手先を採用する積極的な理由が定かでなく、古例では出三斗腰組の方が多い。
- ③ 柱盤設置法に問題があり、2階床と別に1階に組入天井を張る手法も古代の楼造には適用しないほうが良い。
- ④ 楼造の寄棟例は時代が降るものの以下の例がある。

- ・青井阿蘇神社楼門（慶長18年）
- ・朝光寺鐘楼（袴腰付鐘楼、鎌倉後期）
- ・法蔵寺鐘楼（袴腰付鐘楼、室町時代）

**今年度の検討事項** 設計要旨を固めるために、最新案の問題点を含め、類例調査と構法検討を行った。

① 2階軒組（最新案問題点①） 隅の間正方形でなく三手先組物で軒を真隅に納めるものに平等院鳳凰堂中堂があり、また軒でないが唐招提寺金堂や東大寺法華堂の身舎も隅の間正方形でなく、手先組物およびその上の天井支輪は真隅に納める。これらは隅行材の延長が必ずしも奥の柱真上になく、また和様三手先組物（雲斗雲肘木含む）の尾垂木・地垂木・隅木尻は内部天井により見え隠れとしており、今回も同様に組物・軒を真隅に納められると判断した。なお鎌倉時代までの楼造はほとんどが2階隅

の間が長方形で軒を真隅に納める(表2)。

②腰組(最新案問題点②) 二手先腰組の古例は、薬師寺東塔裳階・平等院鳳凰堂翼廊・同隅楼にあり、うち薬師寺および平等院隅楼例は挿肘木形式である。一方楼造においては法隆寺経蔵及び鐘楼をはじめ、鎌倉時代初期までの多くの楼造古例が出三斗形式で(表2)、二手先以上の腰組は鎌倉時代後期以降に多く、上層組物が二手先以上のものに連動する。二手先腰組を全く否定するものでないが、総合的に判断して2階組物が簡素なときは出三斗形式にし、賑やかなときは釣り合いを取るため二手先という2案を想定しておくことで、1・2階各々2種ずつの組物を漏れ落ちなく検討することとする。

③通減の有無と柱盤の位置(最新案問題点③) 2階柱盤設置法は2種あり、1つは法隆寺経蔵・鐘楼のように、腰組直上に柱盤を置きその上に2階床板・縁板を張る形式、もう1つは平等院鳳凰堂翼廊や中世楼造に共通するもので、腰組上の板張りの上に柱盤をおく形式である。前者は下から見えることから、1階柱筋に揃えて入れ通減がほとんどない。それに対し後者は2階通減を通常とし、柱盤は1階柱筋の真上に載らないが、板張りにより下から見え隠れとなる。今回は両構法を想定する。最新案では、通減しながら柱盤形式を法隆寺経蔵に倣ったため、宙を飛ばす柱盤を2階床板と別の1階天井で隠す。二重に板を張るもう一つの理由は、1階隅の間長方形と関係し、腰組の隅叉首を45°内方に延ばしたときの悪い納まりを隠すためであるが、これを解消するには春日大社中門や古代塔建築のように天井を柱天端高さにするか、近世以降の楼造にみられる内部側の一手目に通肘木をまわして天井を張る方法にしなければならないが、今回の楼閣にこれらの構法を採用することは控える。鎌倉時代前期までの楼造で1階隅の間正方形でない場合の隅叉首の扱いをみると、隅通肘木を入れずに隅叉首を隅柱から外にだけ出すものが多く(表2)、中柱位置に組物がある場合、隅通肘木の納まりや形状に無理があることから、今回は隅柱から外だけに隅叉首を設ける。

④2階内部柱の有無 法隆寺経蔵のように柱盤の上に床板を張るときは、各柱筋に柱が並んでも床板上に通行の支障になるものはないが、平等院鳳凰堂翼廊式の柱盤設置法で内部柱を立てる場合、上層内部床板の上に柱盤を一方向あるいは縦横に渡すことになり通行の妨げとなる。

鎌倉初期までの楼造では、小規模だが内部柱を入れない例が多い(表2)。正倉院正倉の内部柱は柱盤上に立ち、床板との関係も法隆寺経蔵式に通じ、平等院鳳凰堂翼廊は内部柱がないものの折れ曲がり部では柱盤が内部に通り一様な水平面ではない。以上のことから今回は柱盤構法が法隆寺経蔵式の場合は内部柱を入れ、そうでない場合は内部柱を入れない。

⑤2階の梁長さ平面計画 最近の研究では、建材(樹木長)の制約から一材でとれる最大柱間寸法は10mが基準で、鼻先を含めても単一部材長の限度は12~3mとし、大規模の場合単一材で固めた周囲に継ぎ足す構法をとるとする。今回の楼閣は大規模で、平面規模では東福寺や知恩院などの大型二重門に匹敵し、大型楼門の東大寺中門(桁行約22.8m、梁行約7.8m)より大きい。腰組二手先の梁行二・三段目通肘木および縁葛は15~6m程になるが、その他は上層通減する虹梁が約13.5m、地隅木が約13m、下層掘立柱が約10m、隅行尾垂木が約8.5mで納まると思われる。以上から今回は梁行総柱間10m以下にこだわらずに2階平面計画をし、桁行は継ぎ足すが梁行軸部と組物は一材で組み固める方針とする。

正倉院正倉は梁(兼腕木)長さ約13m(成約40cm×幅約25cm)で、弱点の中央部を中柱2本で支持し、梁行3間等間も今回の楼閣と同じで、同様の構法なら梁断面を必要以上に大きくすることなく参考になる。

2階の通減は、柱盤が腰組最上段通肘木にかかる程度とし約1.5尺とする。また1・2階の隅柱が45°線上に並ぶ平面で側柱以外は通減させず(内部柱は1・2階とも同位置)に、一間寸法が完数になるよう設計した(図23)。

⑥入母屋架構の構法 これまでの検討から、通減の有無と柱盤形式、内部柱の有無によって構造形式を2つに分けられるが、さらに通減しない場合の2階天井形式を2種類に分け、表4のように3つに分類した。いずれも身舎だけの空間構成になり、各々の上部架構を検討した。共通条件として、梁行三間分に大梁を架けて小屋組を支持し、対軒荷重のために隅木・地垂木尻の位置である地垂木の折れ点を側入側間に計画した。

a.折上天井の上部架構(図23) 2階通減する場合は軒の出が9.5尺以上で三手先組物とし、上述のように尾垂木内部は見え隠れとすることと、水平天井では真隅の隅組物が納まらないので折上天井を張る。平等院鳳凰堂中堂

が身舎だけの空間構成で隅の間正方形とせず、三手先組物・入母屋造で、折上天井は唐招提寺金堂・東大寺法華堂の身舎天井が参考になる。平等院式三手先の外部側を出土雛形式に、内部側を唐招提寺金堂身舎二手先式に改め、虹梁墓股形式を唐招提寺講堂に倣うと、虹梁と三手先の関係が悪く虹梁を一段下げて鼻先を力肘木とすることで調整した。内部側が唐招提寺式でなくなり、二手先肘木の形状に疑問が残るが、山田寺跡の出土肘木<sup>6)</sup>例や、中国・韓国建築の組物架構を参考にした。しかし、虹梁と組む内部二手目の通肘木を方斗と鬼斗でしか受けていないとか、虹梁とともに内部小天井が下がり内外小天井に落差がつくという問題が発生している。通肘木は唐招提寺金堂・東大寺法華堂では三斗で受けるし、小天井は唐招提寺講堂例を採用しにくいことから今のところ解決策がない。虹梁・天井の高さ関係と雛形式三手先組物との相性の悪さが判明した。

また尾垂木尻掛けの土居桁は、空間構成の類似性から平等院鳳凰堂中堂のように天井直上に置く方法が最も適しているように思われたが、尾垂木勾配の関係で東立にせざるを得なかった。東割は母屋割や地垂木折れ点とも関係し、棟側筋間を三等分(6尺間隔)か四等分(4.5尺間隔)が適当と思われるが、二手先通肘木上でも東立で土居や母屋を受けるように四等分で考え、四つ割の外側母屋を地垂木折れ点に、中央の筋に墓股を想定した。天井桁端は法隆寺金堂のように小屋内で延ばして梁の役割をもたせ、上方に二重梁・束架構の小屋組を想定した。妻側には梁がなく、尾垂木尻受け土居の筋と妻飾直下にかかる荷重を二手先のみで受け、隅もまた二手先のみで支持し、この直上には隅木尻が納まる。妻梁を架ける例は当麻寺本堂や正倉院正倉等倉庫建築にみられ、中国・韓国建築の架構にもあるが、唐招提寺金堂・東大寺法華堂・平等院鳳凰堂中堂にはない。

b.水平天井の上部架構(図24) 内部柱を3間等間に立てるので、棟側筋間の母屋割りを三等分(6.5尺間隔)にし、地垂木の折れ点を側側筋間の中央にして、折れ点を妻側に廻した母屋を妻飾土台と考えた。妻側母屋の支持法として、正倉院正倉では妻から内部に向かって、軒支持の腕木と繋ぎを目的とした梁を2筋ずつ架けており、同様の手法で妻梁を架けて東立で母屋を支持することが考えられる。当麻寺本堂はこれをすべて化粧にした

もので、妻虹梁を大虹梁の側面につけ墓股で上方化粧母屋を支持する。ここでの問題は隅木尻の掛かる母屋隅組において片持ち梁同士が組むことで、梁行方向6.5尺、桁行方向9尺となる。片持ち梁の隅組で隅木を支持する構法は当麻寺本堂や唐招提寺宝蔵にあるが(表3)、隅木中間を受けるものであり、今回の隅木尻や妻飾を受けるといことに関しては検討を要する。また、軒荷重を考慮すれば地垂木・隅木の尻位置をもっと奥にしたほうが良いと思われる。

c.化粧屋根裏の上部架構 1993年の三重虹梁墓股・化粧屋根裏を入母屋造にできるか検討している。二重虹梁墓股・化粧屋根裏の隅木入り建物である唐招提寺創建講堂や当麻寺本堂等を参考とする。

基本的な骨組みは水平天井式と同じで、内部柱を3間等間に立てて梁を支持し三重梁構造とする。各梁および母屋を支持する位置も共通し、正倉院・当麻寺例により妻虹梁を2筋ずつ架けて、墓股で化粧母屋を支持することになる。妻の立ち所も同様で、隅木尻の掛かる化粧母屋が片持ち梁になる問題も同じである。

1993年案では地垂木に折れ点がなく三重とも同様の虹梁墓股としているが、今回は妻飾の大きさを意識して側通りから1つ奥の母屋筋で地垂木を折るため、上の墓股を高くするか又首組にするなどの検討が必要であり、折れ点をつくらず小さい妻飾で検討する必要もある。また妻側地垂木・隅木の尻が化粧で見えてくるが、新薬師寺本堂では隅木尻木口を堂内に見せ、妻地垂木は妻小壁の中に隠すので参考となる。

⑦回廊との取り付け 楼閣と回廊は「回廊中央筋-楼閣南側筋」「回廊北側筋-楼閣南から第2桁行筋」にずれがあり、回廊桁行材の取り付けが問題となる。

前者は僅か1尺で、回廊の垂木掛となる桁行材(棟木・中桁)を楼閣の柱を避けつつ通す手法であろうとの見解が以前からあり、楼閣正面につく回廊化粧垂木の掛け方は裳階垂木の取り付けに類似することから、裳階古代例である法隆寺金堂・同五重塔・薬師寺東塔・平等院鳳凰堂中堂のうち、薬師寺東塔・平等院鳳凰堂中堂を参考に長押風の横架材を垂木掛とした。

後者については柱筋のずれが2尺ある。回廊と他建物との取り付けは、屋根が接続する場合と接続しない場合があり、今回の楼閣-回廊間は、南流れが一連の屋根で

繋がることから接続させることとし、柱筋がずれて桁行材を取り付かせる技法には、法隆寺東院礼堂一回廊、同舎利殿絵殿一回廊があり、これらを参考にして、貫状の横架材を楼閣柱間に渡し、その上に回廊頭貫（あるいは側桁）を架け、回廊化粧母屋は横架材上に束を立てて受けることにした。屋根を接続させる場合、緇破風で軒の見切りとするものが多く、法隆寺東院・春日大社例に倣い、楼閣柱側面に緇破風をつけ、螭羽については掛瓦+降棟も考えられるが、とりあえず伏せ葺きとした。

今年度の設計要旨 高い楼造建築であることは当初からの方針に従い、屋根形式は出土隅木蓋を根拠に入母屋か寄棟を想定するが、総桁行長さに対する梁行が大きく、真隅隅木の寄棟造では大棟が短くなり、デザイン上の理由で入母屋造とする。回廊と東楼の礎石（基壇）高さが同じことから、1階を南面以外柱間装置なしの開放で、回廊と一連の空間とする。材料の制約から1・2階の柱を別にして通柱としない。1階側柱を掘立柱とする理由は、楼造建築の重心が上方にあり、1階開放ではさらに不安定なため、その弱点を補う措置であったとしておく。

2階平面を2種類想定し、上部形式もある程度限定できると考えた。1つは通減がなく法隆寺経蔵のように2階は柱盤の上に床板を張り、もう1つは通減させて平等院鳳凰堂翼廊のように床板の上に柱盤を置く形式とする。前者では腰組を出三斗とし、2階の内部に柱を立て、組物を手先の出ないものとし、大梁と同じ高さに天井を張るものと化粧屋根裏の2案を想定する。後者は腰組を二

手先とし、2階は内部柱を立てず、組物を三手先とし折上天井とする。よって、表4のように3案並列で検討していく。共通条件として、隅又首は隅柱から外だけに設けて内部には通さず、2階架構は大梁を架けて小屋組を支えることと、地垂木の折れ点を側入側間とすること、回廊の取り付けは、回廊北側柱筋では楼閣柱間に横架材を渡してそれに回廊頭貫（側桁）を架け、横架材に束を立てて回廊化粧母屋を受けること、また楼閣際は緇破風で見切り、破風上の瓦葺は伏せ葺きとすること、楼閣正面側の回廊垂木は、楼閣柱間に渡した長押風の横架材（回廊化粧桁・棟木と同筋）に掛けること等を決めた。

今後の課題 今年度検討した中でも新たな問題点が生じ、構造面・細部技法等全般におよぶ。今後はさらに検討を重ね、現在の問題点を解消しながら復原案を絞り込んでいくことと、これまで未検討であった造作関係の調査・検討を進める必要がある。

（金子隆之／奈良県・清水真一・清水重敦）

- 1) 『平城報告 XI』奈文研 1982  
『復原建物設計専門委員会資料』奈文研 2001
- 2) 『平城報告 XI』奈文研 1982
- 3) 「平城宮第一次大極殿復原模型の製作」『年報1994』奈文研
- 4) 『復原建物設計専門委員会資料』奈文研 2001  
『第1回宮跡復原整備検討委員会資料』奈文研 2002
- 5) 村田健一「古代建築における建物規模・構造と部材長」『年報1999』  
同「古代建築に見られる10mモジュール」『文化財論叢Ⅲ』2002
- 6) 『山田寺発掘調査報告』奈文研 2002
- 7) 『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会 1972

表2 鎌倉時代までの楼造

番号	所在	名称	区分	時代	年号	西廻	屋根	上層							下層			出典			
								透減の有無	柱盤の高さ(板の上下)	柱盤の平面配座	隅の間の平面形	内部柱の有無	組物	軒	隅木	隅の間の平面形	腰組		隅又首	隅柱材木の有無	
1	奈良	法隆寺経蔵	経蔵	奈良			切妻造	○(少)	下	側通りと縁通り	正方形	×	半三斗	二軒繁垂木	*	正方形	出三斗	真隅	真隅	修理工事報告書	
2	奈良	法隆寺鐘樓	鐘樓	平安中期	寛弘02~寛仁04		切妻造	×	下(縁板の下で床(天井)板はなし)	側通りと縁通り すべての柱筋	長方形(縦長)	○(角)	半三斗	二軒繁垂木	*	長方形(縦長)	出三斗	真隅	真隅	修理工事報告書	
3	京都	平等院鳳凰堂翼廊	楼造廊	平安中期	天曆01	1053	切妻造 隅棟瓦形造	○	上	側通りのみが基本、折れ曲がり部のみ内部に通す	長方形(縁通りと第2柱筋の交点に対し縦長) (折れ曲がり部は正方形)	×	半三斗	二軒繁垂木	折れ曲がり部真隅	長方形(縁通りと第2柱筋の交点に対し縦長) (折れ曲がり部は正方形)	出三斗 真隅	真隅 (寄・折れ曲がりとも)	なし(折れ曲がり部は真隅)	修理工事報告書	
4	奈良	長谷寺楼門	一間一戸楼門	平安後期	崇山		入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	半三斗	二軒半繁垂木	真隅	長方形(縦長)	出三斗 真隅	真隅	×	修理工事報告書	
5	奈良	唐招提寺鼓樓	鼓樓	鎌倉前期	仁治01	1240	入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	出三斗	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	出三斗	真隅	真隅	保存図	
6	滋賀	大野神社楼門	三間一戸楼門	鎌倉前期			入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	○(角)	半三斗	二軒半繁垂木	真隅	長方形(縦長)	出三斗	真隅	×	修理工事報告書	
7	奈良	新薬師寺観音	袴腰付楼門	鎌倉前期			入母屋造	×	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	三手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	なし	真隅	×	修理工事報告書	
8	奈良	船若寺楼門	一間一戸楼門	鎌倉前期	文永7		入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	出三斗	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	出三斗	真隅	×	保存図	
9	奈良	法隆寺翼廊	袴腰付楼門	鎌倉前期	永仁04	1296	入母屋造	○(少)	上(同高)	側通りのみ	長方形(縦長)	×	三手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	なし	真隅	×	修理工事報告書	
10	岐阜	門前寺楼門	三間一戸楼門	鎌倉後期	永仁04	1296	入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	三手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	なし	真隅	×	修理工事報告書	
11	奈良	石上神宮楼門	一間一戸楼門	鎌倉後期	文保02	1318	入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	三手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	なし	真隅	×	修理工事報告書	
12	愛媛	石手寺二王門	三間一戸楼門	鎌倉後期	文保02	1318	入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	○(角)	三手先	二軒繁垂木	真隅	正方形	三手先	真隅	真隅	保存図	
13	栃木	蓮阿寺楼門	袴腰付楼門	鎌倉後期			入母屋造	○	上(同高)	側通りのみ	長方形(縦長)	×	出三斗(神宗様)	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	三手先	真隅	真隅	?	保存図
14	愛知	甚目寺南大門	三間一戸楼門	鎌倉後期			入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	×	三手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	三手先	真隅	真隅	×	保存図
15	滋賀	石山寺楼門	袴腰付楼門	鎌倉後期			入母屋造	○	上(同高)	側通りのみ	正方形	×	三手先 (尾垂木なし)	二軒繁垂木	真隅	正方形	三手先	真隅	真隅	×	修理工事報告書
16	京都	九品寺大門	三間一戸楼門	鎌倉後期			入母屋造	○	上	側通りのみ	正方形	○(角)	三手先 (尾垂木なし)	二軒繁垂木	真隅	正方形	三手先	真隅	真隅	×	修理工事報告書
17	大阪	金剛寺楼門	三間一戸楼門	鎌倉後期			入母屋造	○	上	側通りのみ	長方形(縦長)	○(板直上に互つ)	三手先	二軒繁垂木	真隅	正方形	三手先	真隅	真隅	×	保存図
18	兵庫	開光寺楼門	袴腰付楼門	鎌倉後期			寄棟造	○	上(天井板は組物二層分下がる)	側通りのみ	長方形(縦長)	×	二手先	二軒繁垂木	真隅	長方形(縦長)	三手先	真隅	真隅	×	保存図

表3 鎌倉時代までの妻梁例

番号	所在	名称	区分	時代	年号	西暦	屋根	組物	軒	隅木の取れ	空間構成 (桁行×梁行)	隅の間の平面形	隅木戻りの納まり (密構例は中間の支持)	妻梁の有無 (向筋づつか)	出典	
1	奈良	法隆寺金堂	二重仏堂	飛鳥			入母屋造	簀形三手先	一軒繫垂木	真隅	上置身舎のみ (小屋組) (4×3)	正方形	柱貫	力肘木 (2筋)	修理工事報告書	
2	奈良	法隆寺中門	四階二戸二重門	飛鳥			入母屋造	簀形三手先	一軒繫垂木	真隅	身舎のみ (上置小屋組) (4×3)	正方形	柱貫	力肘木 (2筋)	保存図	
3	奈良	正倉院正倉	校倉	奈良			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×3×3)	横長	片持ち隅組	2筋	保存図	
4	奈良	富原寺本堂二次前身堂	七間堂	奈良後期	延暦か		寄棟造	大斗肘木	*	二軒繫垂木	真隅	身舎 (5×2)・底 (対象は身舎)	正方形	片持ち隅組	1筋 (身舎内部)	修理工事報告書
5	奈良	唐相違寺玉室	校倉	奈良			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×3)	横長	片持ち隅組	1筋	修理工事報告書	
6	奈良	唐相違寺経庫	校倉	奈良			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×2)	横長	なし	なし	修理工事報告書	
7	奈良	東大寺本坊経庫	校倉	奈良			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×2)	横長	柱筋から外れて梁を架け、母屋隅組を束で支持	1筋	修理工事報告書	
8	奈良	東大寺勧修寺経庫	校倉	平安前期			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×2)	横長	柱筋から外れて梁を架け、母屋隅組を束で支持	1筋	修理工事報告書	
9	奈良	東大寺法華堂経庫	校倉	平安前期			寄棟造	*	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×2)	横長	柱筋から外れて梁を架け、母屋隅組を束で支持	1筋	修理工事報告書	
10	奈良	法隆寺南針殿	他	平安前期			寄棟造	出桁	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×3×3)	横長	片持ち隅組 (隅梁を架けて筋り修理筋はその上に梁を立てて支持)	2筋+隅梁	修理工事報告書	
11	岩手	中野寺経庫	経庫	平安後期			宝形造	舟肘木	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (ただし小屋は三間堂の配置) (3×3)	正方形	小屋束の配置は三間堂と同。隅木戻りは小屋束位置	なし	保存図	
12	京都	教王護国寺宝篋	校倉	平安後期			寄棟造	*	一軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×2)	横長	柱筋から外れて梁を架け、母屋隅組を束で支持	1筋	保存図	
13	広島	龜島神社本社社殿	拝殿・妻入	鎌倉前期	仁治02	1241	入母屋造	平三斗	二軒繫垂木	真隅	身舎 (5×1)・底 (3方)	正方形	柱貫	2筋 (底梁)	基礎資料集成	
14	広島	龜島神社供社客社社殿	拝殿・妻入	鎌倉前期	仁治02	1241	入母屋造	平三斗	二軒繫垂木	真隅	身舎 (3×1)・底 (3方)	正方形	柱貫	2筋 (底梁)	基礎資料集成	
15	京都府宇治市	白山神社拜殿	拜殿	鎌倉後期	建治03	1277	寄棟造	舟肘木 (僅のみ)	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (ただし小屋は三間堂の配置) (3×3)	横長	小屋束の配置は三間堂と同。隅木戻りは小屋束位置	なし	保存図	
16	滋賀	御上神社拜殿	吹放拜殿	鎌倉後期			入母屋造	舟肘木 (僅のみ)	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×3)	正方形	桁上に梁行大梁を2筋架け、その上に垂木桁を并桁に筋す (垂木桁は柱より少し外側にずれる)	なし	保存図	
17	大阪	法道寺金堂	七間堂	鎌倉後期			入母屋造	出三斗	二軒繫垂木	真隅	身舎のみ (7×3)	横長	妻梁上の束で土屋隅組を支持	2筋	修理工事報告書	
18	奈良	旧春日大社板倉 (円窓)	他	鎌倉後期			宝形造	出三斗	一軒繫垂木	真隅	身舎のみ (3×1)	正方形	柱貫	なし	修理工事報告書	
19	奈良	長福寺本堂	五間堂	鎌倉後期			入母屋造	平三斗	二軒繫垂木	真隅	身舎 (3×1)・底 (4方)	正方形	柱貫	なし	保存図	

表4 今年度の楼閣主要構造型式3案

	2階減減の有無	柱盤形式	2階内部柱の有無	2階組物形式	腰組形式	2階天井形式	2階小屋構造	屋根形式	軒
1	○	平等院式	×	三手先	二手先	折上天井	束・梁	入母屋造	真隅・二軒繫垂木
2	×	法隆寺式	○	大斗肘木	出三斗	水平天井	束・梁	入母屋造	真隅・二軒繫垂木
3	×	法隆寺式	○	大斗肘木	出三斗	化粧屋根裏	三重虹梁葺股	入母屋造	真隅・二軒繫垂木

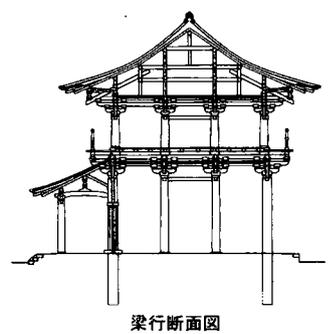
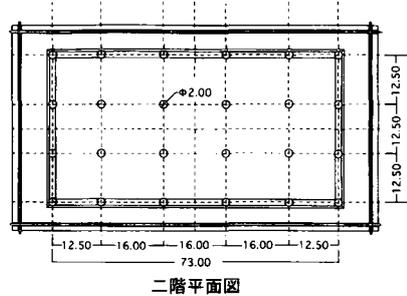
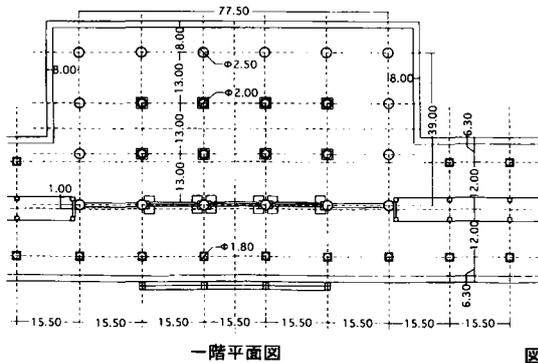


図22 平成13 (2001) 復原案

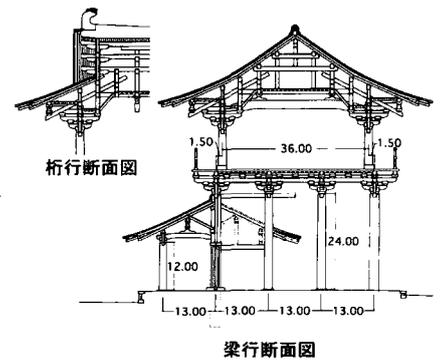
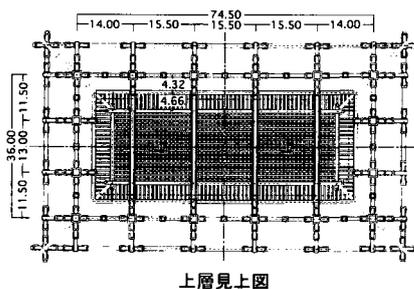
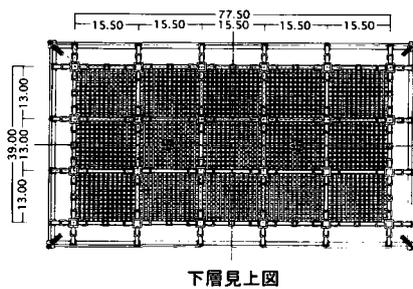


図23 今年度の復原案 (その1)

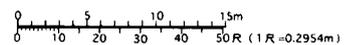
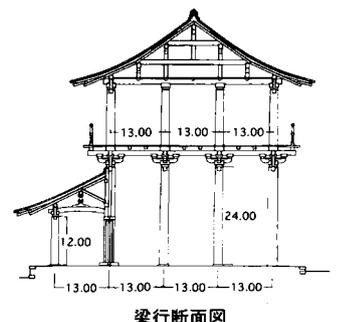
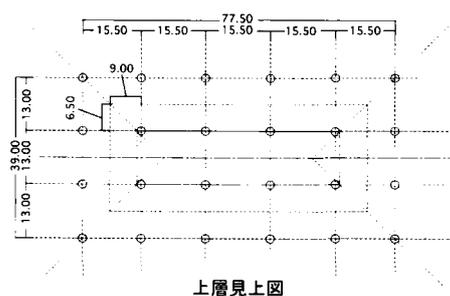
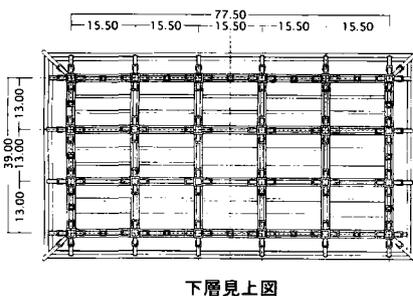


図24 今年度の復原案 (その2)